愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第34巻　13～25　1988

感情の構造論からみた現代青年の特徴

福　井　康　之
（教育心理学研究室）
伊　藤　　徹
（障害児教育研究室）
（昭和62年10月12日受理）

感情の定義

感情というものを定義しようとするときにいろいろの混乱がみられる。Rapaport, D. (1950) は感情というものを現象面からみると三様の定義のしかたがあるという。

一つは，直接経験しているものとして言語報告のできるもの，例えば，怒り，恐怖，喜び，悲しみなど，どう感じているかというふうな，経験の意識からの定義である。

二つめは，感情にもとづく行動からの定義である。例えば，びっくり仰天する，悲痛な叫び声をあげる，恥ずかしくて逃げ出す，なつかしくてすり寄る，というように，観察できる行動から推測される感情である。

三つめは，生理学的なプロセスに焦点を当てた定義である。これは自律神経系の賦活や大脳辺縁系の興奮などを，電気的・化学的変化として測定して，その程度や種類を分類するやり方である。感情を身体的変化として表現したもの，例えば，立腹する，赤面する，心臓がドキドキする，背すじが寒くなる，ガタガタ震える，といったような外から観察できると同時に，本人もその身体的変化が意識できるものであり，それは感情を示すものとして注目されてきていた。

二つめと三つめは，客観的な定義に近づくが，観察や測定可能な感情にその定義が限られる危険性がある。しかし，1の意識されるものとしての定義は，さまざまな感情を網羅して巾広いが，主観的である。そのため意識化され，言語的に表現されるというステップを踏むと，本来の姿から歪曲，修正されてくるという危険性がある。

感情を表現する言葉と主観的な感情の意識との結びつきは，経験を通じて獲得されるわけであるから，共通した文化や時代によって，言葉に込められている意味的内容にはずれがある。感情語の翻訳にあたっても，外国語と日本語との間の表現の微妙な差が十分理解できるか疑わしい。

個人によっても，感情内容を正確に表現できるかは，豊富な語彙が使えるかどうかによってずれが生じる。幼児の感情を聞き出すことはかなり難しい。これは幼児の感情が，使用できる言葉が増えていくほど分化していくということをも意味している。

感情を大脳皮質のコントロールの弱化または喪失という観点で定義するという立場もある。大脳皮質は低次の脳や神経の活動を支配しているので，興奮や葛藤ないしは欲求阻止，あるいは突然の緊張の弛緩によって，大脳皮質のコントロール機能が低下するか，一時的に停止する。突

然，怒り出したり，泣いたり，笑ったりするのは，そのせいであるというわけだ。しかし，これは激しい情動を説明できても，もっと弱い感情や複雑な感情を説明することができない。

あるいは，感情は活動水準，特に意識の活動水準の急激な変化によって生じるという説もある。これも激しい感情の興奮は，ときとして，無目的な過剰な身体活動を惹き起こしたりするし，矛盾した活動の結果，行動の麻痺を惹き起こすという現象を指している。恐怖のあまり，棒立ちになったりするということはあるが，まれであろう。

また，疲労，睡眠不足，病気などで気分が悪く活動水準を低下させるということもあり，感情の種類によって，活動水準が高まったり，低下したりするわけだ。

感情の発達

新生児から成人まで，感情の意識やその表出は分化発達していくと考えられている。発達していくにつれて，今まで感じなかった感情が出現してくるとは考えないで，もとからある感情が細かく分かれていって，微妙な違いが判るようになるというふうに考えられている。

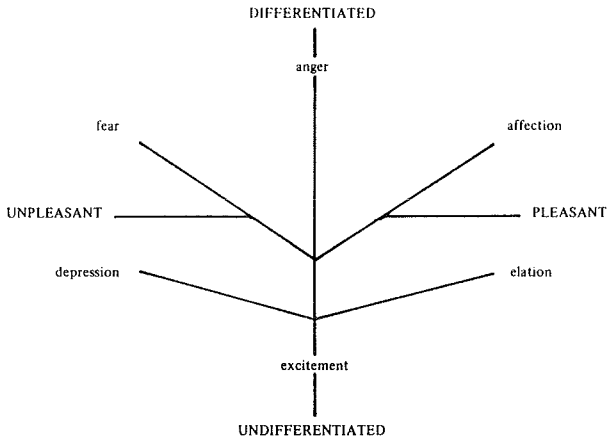

図1.　Excitement as basic, undifferentiated emotion.　　Stratton (1928)

Stratton, G. M. (1928) は，感情を混合して一体化している興奮状態から分化した興奮へと発達していくと考えた。感情的興奮は快－不快という快楽の次元と，高揚と抑制という活性化の次元があり，未分化な興奮が分化していくにつれて，恐れ・怒り・愛という質の違った感情と，この２次元の軸との組み合せで表現できる感情が細かく意識できるようになるとしている。（図１）

乳児の感情表現は，不快あるいは苦痛だと推定できる泣き叫びが，出産時の産声から始まって，最初から表現されている。それ以外のときは，眠っているか，満足感のような気嫌のよい表現をしている。やがて微笑反応が生じるが，観察していても，状況とは対応しないで，くり返し微笑している。

やがて，母親の微笑に応じて，微笑を返すようになったり，あやされると笑ったりするようになる。これは，感情の表現と身体的表現の学習に連ながっている。同じ微笑反応といっても，周囲からの働きかけによって生じる笑いと，飢えや渇きなど基本的欲求充足による満足感の表現である微笑とは分化してくる。また，生後２か月くらいで，母親の実物の顔には，口元だけでなく顔いっぱいの笑いを示し，５～６か月くらいになると，実物以外の絵や写真の顔には微笑しなくなる。実験で目や口などの配置を変えたバラバラの目鼻の顔の模型には笑いを示すが，これは親しみの笑いでなく，予想に反した事物に対するおかしさの笑いだとされている。

泣き声も，空腹による不快感か，眠りを妨げている不快感――おむつが濡れているとか，着

せすぎて暑いからとかの区別も，たいていの母親は聞き分けることができる。

乳児にとって不快感は，体温の恒常性維持や血液の濃度維持，すなわち，渇きの欲求など生体のホメオスティシスの維持と栄養の摂取と排泄，呼吸など新陳代謝という生命の存続の危機に直接連ながっている。これらは乳児自身が障害を除去したり，必要なものを入手することができないので，周囲の働きかけに全面的に依存している。

乳児は信号を送って，周囲からの保護や介助を要求したり，また充足されたことを伝える必要がある。何が緊急に必要なのかを伝えるために，泣き声や表情を区別することを，周囲の人物，とくに母親との相互関係のなかで学習していく。

おむつが濡れて気持ちが悪い――下半身の体温の低下や排泄器官周辺の皮膚への化学的変化による刺激による不快感の伝達は，空腹による不快感とは異った叫び声を出さないと的確に処置してもらえない。

感情表現の伝達の差異化は，有機体の生命維持と密接に結びついて発達分化してくる。乳児が自身の感情を意識すること以前に感情表現の分化が生じてくる。感情表現の仕方あるいはその種類は，囲りからの働きかけの仕方と受け取り方の違いによって異なった表現様式が確立してくる。

周りの応対がきめ細かいと，細やかな感情表現が確立されてくるし，それに伴って，乳児が意識する感情も分化の程度も発達し，バラエティに富んだものになる。

乳児の要求を先どりして，欲求不満を感じないように母親が働きかけると，不快な感情を経験しない。だから，不快な感情を伝える必要がないから，不快感情の分化は進まないし，満足度の程度を示すこともないので，快―不快の感情も分化が遅れることになる。

乳児は情緒的に安定した状態を維持できるように思えるが，内的な要求を自発的に伝達することができなくなる。しかし，過大な要求阻止の体験が多いと，不快感情が高まり，強度の高い感情の表現（泣き叫び）と苦痛な感情の意識が多く体験され，デリケートな感情表現と意識化が発達しない。

適度な内的刺激（欲求の意識化）と外的な刺激（ガラガラや人形など）が必要なのである。さらに抱きかかえられたり，身体運動などを通じて，内蔵の圧迫感や筋肉運動感覚などの心地よい内的刺激による感情の体験を通じて，感情の分化を促進していることになる。

感情の発達分化の図式として，よく引用されるのは1932年に発表されたBridges, K. M. B. の情緒発達のシェマである。（図2）

これによると，新生児は当初未分化な興奮

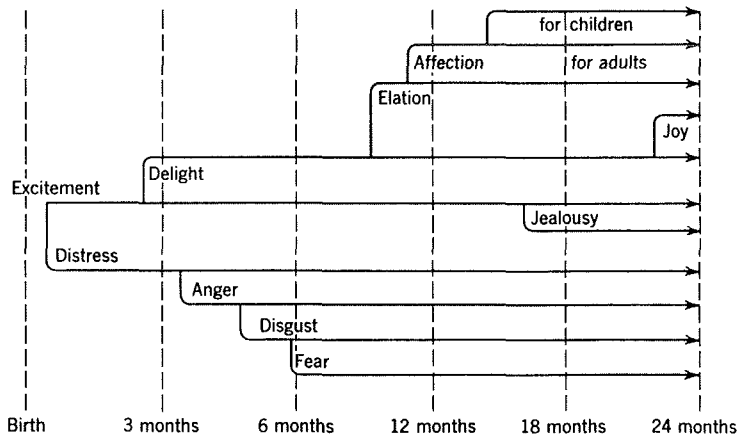

図2. Early emotional development.
Modified from Bridges (1932)

から苦痛と嬉しさが分化し，嬉しさは，喜びと得意と愛に分化し，苦痛は怒りと嫌悪と恐怖に分化する。

ストラットンもブリッジーズも，新生児は情緒が最初は未分化であると考えていた。しかし，行動主義者のWatson, J．B．は1929年の著書で，感情は当初から，３つの次元があって，Xは恐怖，Yは怒り，Zは愛という基本感情があるとしている。たとえば恐怖については①突然支えを失ったとき，②眠りかけや目覚めかけている状態で突然ベッドをゆり動かしたりしたとき，③突然の大きな音を聞いたときに無条件に生じるという。そのときに乳児は大きな呼吸をし，手あたり次第にしがみつき，目を閉じ，口をすぼめて，それから泣き叫ぶという反応をする。

暗闇を怖がるのは，偶然暗い所で大きな音を聞いたりした経験で，条件づけられているからだという。生後発達分化する多様な恐怖感情は生まれつきの３つの恐怖刺激と結びついた条件づけのせいだと主張した。

怒りは乳児の運動を妨害すると生じる。その反応は，泣き叫び，身体の硬直，手足をバタバタして，一瞬息を止める。この感情は，自由を束縛するあらゆることへと拡大されていく。

愛は，身体の性感帯への優しい刺激から拡がる。そうすると，微笑，のどをくっくっと鳴らす（gurgling），気持ちのよい声を出す（cooing）という反応が生じる。

感情の分類

感情を客観的に研究するには，表出された感情表現を分類するという方法がとられた。当然のことであるが，研究者は一番顕著に感情表出が出現するものとして顔面表情の違いに着目した。

表情の科学的研究の始まりは，進化論者のチャールス・ダーウィンとされている。その後の表情研究は主として，顔面表情を見て正確に感情が判断できるかということに集中していた。それは表情を示す写真や絵をいくつかの感情に分類するという研究であった。

Woodworth, R. S.（1938）はこれまでの研究を分析して，感情は次の６つのカテゴリーに分類できるということを示した。

① love（愛），mirth（陽気），happiness（幸福）
② surprise（驚き）
③ fear（恐れ），suffering（苦しみ）
④ anger（怒り），determination（決断）
⑤ disgust（嫌悪）
⑥ contempt（軽べつ）

ウッドワースの共同研究者であったSchlosberg, H.（1941）はFrois-Wittmann, J. F. が研究に使った俳優の表情写真72枚を用いて，この６つのカテゴリーに分類させた。同じことを３回やらすと，⑥軽べつに分類されていた写真が，ときどき被験者によって，⑤嫌悪か ①愛のどちらかに分類されることがあり，この６つの感情のカテゴリーは並列的な分類ではなくて，⑥軽べつと①愛とは連続して，円環状になっているのではないかと彼は考えた。（図3.）

分類に用いたフロア・ウイットマンの使用した表情写真だけの特別の傾向ではないことを，彼は他の人物の表情写真を用いて，同様の結果を確認している。

シュロスバーグは，さらにこの感情の６つのカテゴリー分類の円環が，快―不快と注意―拒

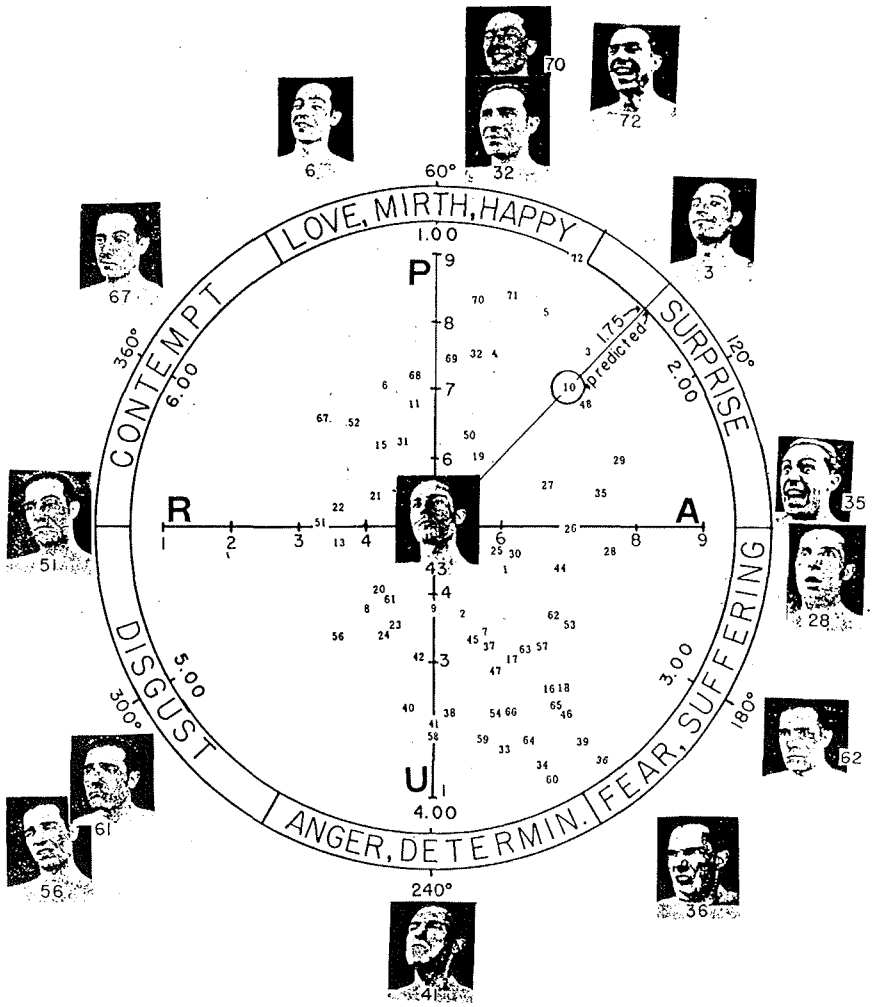

図3. Facial expressions which were classified into one of six response categories. Modified from Schlosberg (1952)

否の2つの次元からなっていることを見出した。彼によると，あらゆる表情はこの2つの直交した2次元の平面のどこかに位置づけられるというわけである。

1954年には，シュロスバーグは，この2次元の軸に直交する賦活水準（緊張—眠り）の第3の軸を付け加え，立錐型の情動の3次元モデルを提唱したのである。賦活水準が低下して，眠りの極に達するとあらゆる情動間の差異がなくなってしまうので，賦活水準の軸の眠りの方は立錐型の頂点になっている。（図4.）

感情分類の表情写真を用いた古典的研究というべき研究は，その後，次のような理由で，研究の方向が転換されてしまう。

研究に用いられた写真が，たいていは俳優の表情写真であるため，実際場面での表情とは違って舞台の上での観客と俳優との暗黙の了解のもとで判断されている作られた表情であるという批判である。

顔面表情は，それだけでは判断が困難で，状況と合せて理解され，文脈の中で正確に判断さ

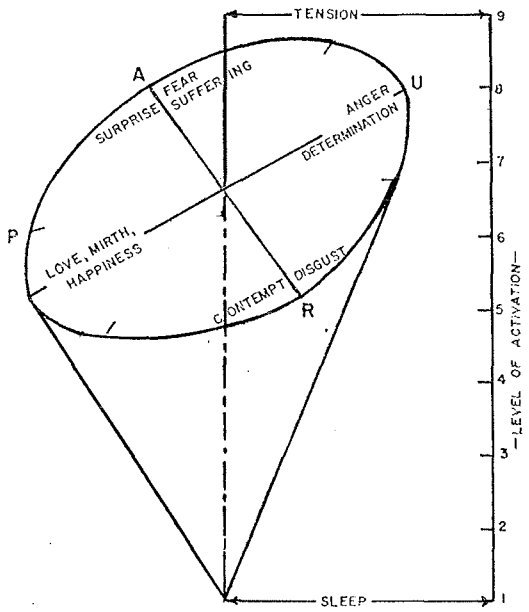

図4.　The solid figure wich represents the range of facial expressions.
Schlosberg (1954)

れている。だから，研究のために使用される表情写真は状況と時間的な連続が必要であり，動く表情写真が必要であり，映画フィルムやビデオを使った研究が待たれることになった。

しかし，それでも，使用される顔面表情の刺激の数は限定されるので，そのような研究から得られた結果は，一般化できるか疑問視される。

しかし，これらの研究は，多彩な感情には，なにか一貫した基本的な構造があるのではないかということを示唆している。

感情語の研究

感情の研究の別のアプローチは，感情を表す言葉から，感情を分類する研究である。

代表的な研究としてはDavitz, J.L.（シーツ）の研究がある。彼は1969年にロジエの同義語辞典（ラス）から，感情語を400語選び出し，40人被験者に，その中から感情語だと思う語を自由に選んでもらった。その中で137語が全員一致で選び出された。

一方，30人に感情を経験したときの状態を示す記述を求め，556の文章が得られた。さらに50人の被験者に556の感情経験を述べた文章を，137の感情語からデビッツが直観的に選び出した代表的な感情語50語に分類させた。最終的には50人の被験者の３分の１以上の一致したものを選び，50の感情語がそれぞれどのような状況かを述べた文章で説明されている感情語辞典ができあがった。

この感情語辞典から，少なくとも３つの感情語の説明に使われている文章を215選び出して分類をすると，12のクラスターに分類できることが判かった。そして12のクラスターは４つの次元に並べられこともわかった。４次元に配列されるクラスター分類は次のとおりである。

賦活水準	①賦活	②賦活過少	③賦活過大
関係性	④前向き	⑤分離	⑥対立
快楽傾向	⑦愉快	⑧不愉快	⑨緊張
能力感	⑩高揚	⑪無能力―不満足	⑫不適切

デビッツの分類の４つの次元のうち，賦活水準，関係性，快楽傾向の三次元は，シュロスバーグの緊張―眠り（賦活水準），注目―拒否，快―不快の３次元と対応ができる。

すなわち，感情は，強さ，方向，快―不快という３次元の構造を持っているということがわかる。

感情の構造

感情は，愛と憎，喜びと悲しみといったふうに両極構造をもっている。このことは常識的な判断からも理解されるが，McDougall, W. (1921)をはじめ，Skinner, B. F. やTolman, E. C. など著名な行動心理学者たちも感情の二極性について語っている。

特に，恐怖と怒りは両極の感情であるということを行動論的に示している。感情はそれに引き続いて行動を生起させる。これは情動は行動の動因として働くという，伝統的な考えからである。恐怖は対象から逃げるとか避けるという行動を引き起し，怒りは対象に対する接近と攻撃という行動を生起する。

また，Burt, C., Cattell, R. B., Guilford, J. P. といったパーソナリティの因子分析的研究者たちも，それぞれの人格特性の因子について二極構造を示していることからも，人格特性因子が，感情語とかかわりが強いので，感情の二極構造を示唆していることになる。

感情語を主観的な判断で分類させると，いくつかの感情語は他の感情語と重なって分類される。Block, J. (1954)は大学生に感情語を，高い—低い，赤—緑，早い—遅い，といった形容詞の対になった評定尺度で評定させた。使用された評定法は，オスグッドのＳＤ法である。

その結果，ブロックは，いくつかの感情語が類似した群に意味上分けられることを見出した。例えば，誇り，得意，愛，満足といった感情語は類似しており，その反対の極の悩み，侮辱，罪，悲嘆はお互いに類似していた。そして，第１のグループは第２のグループの語の評定値と反対の値を示していた。

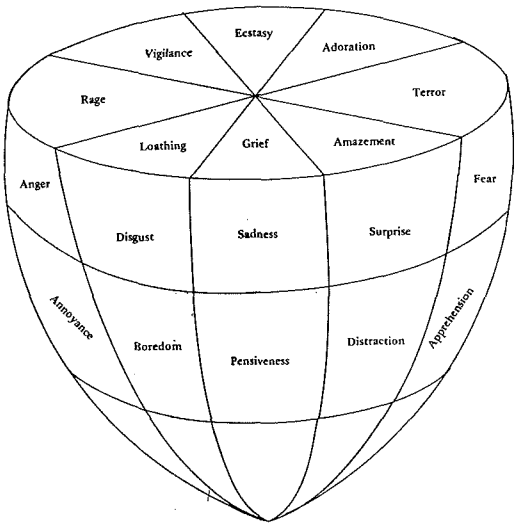

図5. A multidimensional model of the emotions. Plutchick (1980)

感情語の強度差は，研究者によって違った表現がされているが，エネルギーの大きさの程度を示している。それは賦活水準とか覚醒水準といった語で示されている。

Plutchik, R. は1962年に感情の両極性と強度，それとともに類似した感情は隣接した位置にある，という考えから，色彩の立体モデルに似た感情の立体モデルを考案した。これは図５に示されるようにピーナッツあるいはラグビーのボールを半分に割った様な形をしている。このモデルは1980年に出版された彼の著書から転載したものであるが，対になっている感情の名称や配列の位置が，最初発表されたとき（1962）と，若干修正されている。

これによると，従来，４方向または６種類とされていた基本感情は，プラッチクによると８種類あるということになる。彼はこの８種の感情を１次感情と呼ぶ。両極をなしている感情同士は，色彩の補色関係のように特別の関係にあって，相対立し両極の感情が同時に共存するこ

とは難しくその場合にはアンビバレンツな混乱した感情を体験することになる。

隣接する感情は，色彩では混合色を生じるように両者の中間的な感情が形成される。

立体図で上部の断面に表示されている感情が一番強度が強く，下へ行くほど強度が弱まってくる。一番下部では興奮が低下して，眠りの状態となり感情はほとんど意識されない。8つの基本感情に沿って垂直に強度の違いとして区別される感情があるわけだが，立体モデルで示されるように，命名されているすべての感情が整然と同じ小ブロックの積木のように存在しているわけではない。

プラッチクはウエブスター非省略大英語辞典（アンアブリッジド）とロジエの同義語辞典（シーソラス）から，デビッツが試みたように，感情語を収集した。異なった次元毎に多数の同義語が見付かったが，これら感情の同義語の4分の3は不快なあるいは否定的（ネガティブ）な意味合いを持つものだった。われわれが感情を識別するのに，否定的な言葉で表現することが多いことに彼はおどろいている。

それはともかく，このようにして集められた感情語を30人の学生に次のような教示を与えて，その強度を評定するように求めた。

「ここに感情を記述した語のリストがあります。これらのいくつかは（例えば『驚き』と『どっきり』のように）意味合いが非常に似ているが，感情の強さの水準の違いを示しているものがあります。感情の完全なリストを作成し，それぞれの強さの程度を評定してください。評定は1から11の尺度値で示してください。1は感情の最も低い強度を意味し，6が中程度の強度，11は最高の強度です。1から11までどの数値を使用してもかまいません。」

Scale	Incorporation	Protection	Orientation	Reintegration	Rejection	Destruction	Exploration	Reproduction
				Dimensions				
10	Love (9.73)	Terror (10.13) Panic (9.75)				Fury (10.13) Rage (9.90)		Ecstasy (10.00)
9			Astonishment (9.30) Startle (8.53)	Grief (8.80)	Loathing (9.10) Revulsion (8.83)			
8		Fright (8.20) Fear (7.96)				Anger (8.40)		Elation (8.43) Joy (8.10)
7			Surprise (7.26)	Sorrow (7.53)	Disgust (7.60)	Exasperation (7.13)	Anticipation (7.30)	Delight (7.56)
6		Apprehension (6.40) Dismay (6.00)	Confusion (6.60)	Sadness (6.80) Dejection (6.26)	Aversion (6.66) Antipathy (6.10)	Hostility (7.10)	Expectancy (6.76) Alertness (6.13)	Gratification (6.00)
5	Liking (5.43) Trust (5.00)	Wariness (5.03)	Distraction (5.10)	Gloominess (5.50)	Dislike (5.56)		Attentiveness (5.80) Curiosity (5.50) Inquisitiveness (5.30)	Cheerfulness (5.70)
4	Tolerance (4.50) Acceptance (4.00)	Timidity (4.03)	Uncertainty (4.60)	Pensiveness (4.40)	Boredom (4.70)		Mindfulness (4.43)	Serenity (4.36)

表1.　The mean judged intensity of synonyms for each of the eight primary emotion dimensions.　Plutchik (1980)

その結果の代表的な感情語の強度を示したのが表1である。（　）内の数字は評定の平均値を示している。図5の立体モデルの最強度の感情語の「激怒」「戦慄」「恍惚」はほぼ強度10を示し，「悲嘆」はやや低く8.80である。それらよりやや低い強度の7から8程度の感情語を8つの基本感情の円環状に示したのが図6である。なお，3.0以下の評定値を示す感情語はなかったとのことで，感情興奮が低いとその差異がはっきりしなくなることを示唆している。

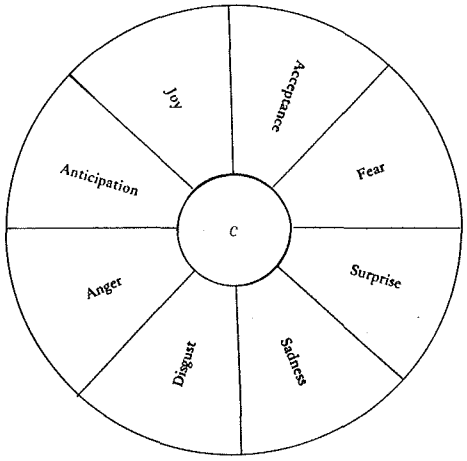

図6.　A cross section of the emotion solid.　Plutchik (1980)

混合感情

感情は基本感情の強度差で全てが説明できるわけではなく，もっと多彩である。そこで，プラッチクは8つの基本感情の両極の感情を除いて，各基本感情の2個宛の組み合せを考え，その混合感情として想像できる感情を多数の感情語から選び出して対応させると

PRIMARY DYADS (mixture of two adjacent emotions)
- joy＋acceptance＝love, friendliness
- acceptance＋fear＝submission
- fear＋surprise＝alarm, awe
- surprise＋sadness＝embarrassment, disappointment
- sadness＋disgust＝misery, remorse
- disgust＋anger＝scorn, indignation, contempt, hate, resentment, hostility
- anger＋anticipation＝aggression, stubbornness
- anticipation＋joy＝optimism, courage

SECONDARY DYADS (mixtures of two emotions, once removed)
- joy＋fear＝guilt
- acceptance＋surprise＝curiosity
- fear＋sadness＝despair
- surprise＋disgust＝？
- sadness＋anger＝envy, sullenness
- disgust＋anticipation＝cynicism
- anger＋joy＝pride
- anticipation＋acceptance＝fatalism

TERTIARY DYADS (mixtures of two emotions, twice removed)
- joy＋surprise＝delight
- acceptance＋sadness＝resignation, sentimentality
- fear＋disgust＝shame, prudishness
- surprise＋anger＝outrage
- sadness＋anticipation＝pessimism
- disgust＋joy＝morbidness(？)
- anger＋acceptance＝dominance(？)
- anticipation＋fear＝anxiety, caution, cowardliness

表2.　Judgments of emotion components of primary, secondary, and tertiary dyads.　Plutchik (1980)

いう手続きを被験者に求めた。

それを整理したのが表２である。第１次の組み合せは，図７の円環状に示されている中程度の感情の隣接する感情同士の組み合せである。たとえば，「喜び」と「受容」の隣同士の感情の組み合せが，「愛」，「友情」という感情と対応するだろうと判断されたわけである。

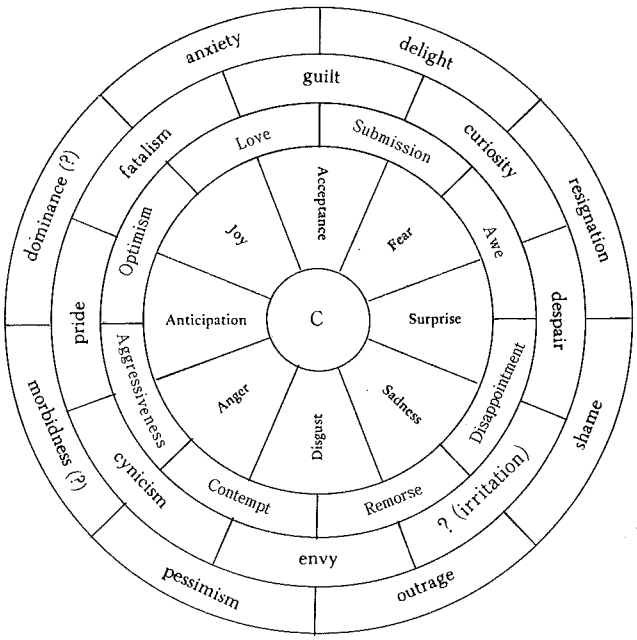

図7.　Primary dyads, secondary dyads, tertiary dyads formed by the combinations of pairs of basic emotions.
Modified from Plutchik (1980)

第２次の組み合せは，一つ離れた基本感情同士の組み合せで，間にはさまっている感情を含み込んでいる。たとえば，「喜び」と「恐れ」の組み合せはその間の「受容」を包み込んで「罪」の感情を示す。そして「罪」は二つの１次混合感情「愛」と「服従」を含む。

第３次の組み合せは，二つの離れた基本感情同士の組み合せで示される。間には二つの基本感情が介在し，三つの１次混合感情と，二つの２次混合感情を含んでいる。「喜び」と「驚き」の組み合せは「受容」と「恐れ」の基本感情と１次混合感情の「愛」「服従」「畏怖」の三つと二つの２次混合感情の「罪」と「好奇心」を含む「嬉しさ」の感情である。これらの混合感情を図示したのが図７である。

この混合感情を加味した感情の立体構造モデルから，複雑な感情が整理できるだけでなく，感情間の力動（ダイナミックス）がある程度推定可能となる。

まず，プラッチクが適切な感情語を見出していない２次混合情動の「驚き」と「嫌悪」の組み合わせからなる感情を推定してみよう。「驚き」とその隣の「悲しみ」の組み合せの１次混合感情は「失望」である。「悲しみ」と「嫌悪」の組み合わせの２次感情は「後悔」である。「喜び」の反対の極である「悲しみ」が「怒り」と「恐れ」の軸に直交し，「後悔」と「失望」が混合し，「恐れ」と「驚き」の一次混合感情「畏怖・警戒」にも「嫌悪」と「怒り」の１次混合感情「侮辱・憎悪・恨みなど」にならず，しかも「受容」と「予期」の２次混合感情「あきらめ・運命」に対立する感情とは，これこそ，「苛立ち」または「焦り」といわれる現代人の心の中にくすぶり続けている感情そのものではないか。突発してくる予期できない情勢のなかで驚き唖然とし，受け入れ難い嫌な課題を次々と突きつけられ，ともすれば「悲しみ」に落ち込んでしまいそうな日常をかろうじて支えているという現代人の生活をイメージすれば，「いらだち」という感情が見えてくるであろう。

さて，混合感情はその組み合わせが多くなるほど基本感情や１次混合感情より，２次，３次混合感情の方がより複合して高次の感情になっているようだ。

現代社会と感情

現代生活の中で，旧式で精神的に豊かで，ゆとりのある教養・知識人といった一部の人々を除いて，多くの人々は，今や，感傷的（センチメンタル）とか，恥らい，ほのぼのとした嬉しさ，楽しみといった感情――かつて情操（センチメント）といわれた洗練された感情は無縁になってきている。

また，巨大な組織的管理社会に組み込まれているので，「支配する」といった感情も無縁だ。そして不思議なことだと思っていたが，以前によく使われていた「不安」という語は影をひそめて，今はまさに，基本感情の一つである「恐怖」という語がよく使用される。「不安は対象のない恐れで，恐怖は恐れをいだく対象がある」と，伝統的に心理学の用語でははっきりと区別して使用されてきている。

現代は漠然としたいずこから来るか不明な恐れを示す「不安の時代」ではなく，明らかにわれわれの生活を脅かす対象は明確であり，横行している悪は，はっきりと何であるかが示されている。われわれが脅えるのはだれもが共通理解している巨大商業資本であり，手出しのしようのない権力機構である。この得体の知れない怪物が，無力な個人をいつ押しつぶすかわからないという「恐怖の時代」にわれわれは生きているといってよいだろう。

基本感情が複合して混合感情になっていくほど，もとの純粋な基本感情より強度が落ちていくようだ。逆に複合感情を分解していずれか一つの基本感情へと還元すると，感情の強度が強くなるのだろうか。相対立する両極の感情は葛藤するわけだから，３次混合感情は対極が少しずれてはいても，隣同士の一次混合感情より対立は大きいからエネルギーの衝突による減衰があるらしい。

発達するに従って感情が分化すると考えられていたが，プラッチクの感情立体モデルから考えると，８つの基本感情は人生初期にすでに存在し，生育するにつれて混合感情もしくは複合感情が意識されるようになることになる。

より高等な感情であるこの混合感情は，複雑な錯綜した人間関係や状況に身を置いたときに経験されるわけだから，成人するにつれてあらゆる次元の複雑な状況が経験されなければ，それを意識することはできない。

そのうえ，状況のなかで経験している感情が，言語的にどう命名されているかを識別しないと，たとえその感情を経験しても，体系だった記憶として残らない。以前に経験したことがある感情だなと判っても，その感情が生じたときにどう対処するのか判らない。

そこで，混合感情はより単純などれか一方の極のより低次の組み合せか，基本感情に還元されて意識されることになる。例えば「恥じる」という感情をこれが「恥」であるというふうに言葉で識別できないと，極端な場合「嫌悪」か「恐れ」のいずれかの基本感情へとその感情を還元してしまって意識される。そうすると「恥かしい」とは感じないで，単に嫌悪感を持つか，恐れの感情を抱くかのどちらかになってしまう。状況として，たとえば，知識のないことが暴露されたといった場合，恥ずかしいと感じずに，暴露した人物に対して「嫌な奴だ」といった感情をいだくか，その人物や状況を恐れて逃げ出してしまう。しかも感情の組み合せが低次化して，この場合基本感情までに戻るので，賦活水準が上昇して，強度が強くなり，その感情を動因として生じる行動はエネルギーが高くなって，極端な行動が生じ，その不快な感情

も強く意識することになるだろう。

青少年と感情

活字離れをし，文学書が読まれなくなり，映像やコミックばかりに親しんでいる現代人とくに青少年たちは，感情や気分，あるいは人の気持のデリケートな違いを言語的に識別できる程豊富な語彙の持ち合わせがない。彼等は自分の経験しているさまざまな感情を，状況の中のイメージとしては記憶していても，言語と対応して記憶体系の中へ貯蔵できないだろうと思える。イメージによる思考は視覚的映像の姿をとるので，ちょうど夢の中で考えているように直観的であるが，言語機能による思考のように論理的ではない。

感情と言語との対応が十分でない場合は，感情の果たす役割は論理的でなく，直観的で予測ができない。ことばを失っている現代の若者の行動や感情が理解できないのは当然のことであろう。

両極構造をなしている感情は，一方の極の感情が高まると反対の極の感情は減衰する。恐れが増大すればその反対の極の怒りは衰弱する。現代の若者は「怒らぬ若者」とまでいわれている。これは前述したように現代が「恐怖の時代」であり，文化を先どりする若者は，恐れの感情の増大にどう対処すればよいのかとまどっているのであろう。

「恐れ」を動因とする行動は逃走である。浅田彰が『逃走論』で書いているように，この逃走は，「一時的，局所的な現象じゃなく，時代を貫通する大きなトレンドの一つの現われなのだ」そうだ。スキゾ型（タイプ）だけが逃げるのではなく，ただ分裂気質（スキゾイド）は時代の動きに過敏に反応するという特徴を持っているので，分裂気質人間の動きが目につくだけなのだろう。

もし，ここで，怒りの感情が増大したら，恐れの感情は減衰するはずである。しかし，怒りを向けるべき対象が強大すぎて，脆弱な青年たちはひき下がって，専ら対決を避け，怒りを示さない。そこで現状を「受容」して「服従」してしまう。これが現代青年の一部に横行する「過剰適応」という行動タイプである。このタイプの人間には「侮辱」というような感情は減衰しているし，「皮肉」や「羨望」といった感情は無縁のようである。

「失望」や「後悔」は「悲しみ」に還元されてしまう。そのような感情の意識を減じるには，「愛」や「楽天」的な感情を喚起すればよい。若者たちは母性愛や異性愛を求めるに熱心であるし，事態を深刻に考えたりすることをあまり好まない。冗談で笑いとばしたり，テレビのお笑い番組だけを追いかけて，日常を笑いでやり過ごそうと試みる。

「嫌悪」と「驚き」の混合感情は「苛立ち」ではないかと先に推定したが，この反対の極は「あきらめ（運命主義）」である。「失望」「後悔」「悲しみ」といった方向をとらずに「苛立ち」を感じている人たちは「あきらめ」の感情を求めて，救いを得ようとするのだろう。第3次宗教ブームといわれる現今の新興宗教教団の乱立はこの反映ではないか。「あきらめ」は第2次混合感情で「予期」と「受容」からなっている感情だ。なにかを期待して待っているという「予期」の感情は基本感情だけでも宗教的なものと結びつき易いことは想像できる。これが「喜び」と結合した第1次混合感情は「楽天」主義である。「楽天」の対極は「失望」であるから，宗教へ走る若者は，「失望」という第1次混合感情は強くないのだろう。やはり，「苛立ち」といった感情の対極としての「あきらめ」を考えると，「受容」が示すとおり，無条件で受け容れられているという安心した世界に身を置くことによって得られる感情を強く求めているということが理解できる。

あきらめ」という2次混合感情の二つの基本感情「受容」と「予期」が若者の宗教に求めている基本的な感情だと分析できよう。

『新人類と宗教』という本を書いた室生忠（1986）は，高度消費経済社会に漂う難民のような現代青年が,新・新宗教に求めているものは，絶対者の実在を信じるという実感体験の世界であると云っている。知育一辺倒で育てられてきた彼らにとっては，全人間的な重々しい感性体験の世界は，はじめて知る新鮮な世界であるといえよう。

しかし，現代の若者たちが感じている日常の耐えがたい抑圧感や疎外感，空虚感といった「いらだち」と「焦り」の根源には現代の社会を根本的に規定している政治・経済状況があるという問題意識を持つことなく，安易に宗教へと逃避しているのではないかと室生は指摘している。

すなわち，「いらだち・焦り」といった自己の感情の由来を問いただすという作業があるということ自体に気付いていないということである。そして，ただ，ひたすら，感情には感情で対処するといった行動図式しか備っていないというわけである。もちろん，全ての現代の青年がそうであるといった安直な普遍化は慎むべきだが，現代という時代は若者にそういった問いかけをする機会すら用意していないといったら言い過ぎだろうか。

現代を覆うこの暗うつな感情の問題は，また，別の視点からも考察されるべきものでもあるので，その課題は別の論稿に譲りたい。

参考文献

松山義則・浜　治世（1974）　感情心理学　第1巻　感情と情動　誠信書房

南　博　監訳（1977）　現代の心理学　第4巻　感覚と感情の世界　講談社

大脇義一（1958）　感情の心理学　培風館

Plutchik, R.（1962）THE EMOTIONS *Facts, Theories, and a New Model.* Random House.

Plutchik, R（1980）EMOTION— *A Psychoevolutionary Synthesis.* Harper & Row.

R. プルチック（1981）情緒と人格（浜治世編『現代基礎心理学　第8巻　動機・情緒・人格』第6章　145－161. 東京大学出版会）

Schlosberg, H.（1952）The description of facial expressions in terms of two dimensions. *Jovrnal of Experimental Psychology,* 44, 229-237.

Schlosberg, H.（1954）　Three dimensions of emotion. *Psychological Review,* 61, 81－88.

Strongman, K. T.（1979）. THE PSYCHOLOGY OF EMOTIONS. 2nd Ed. John Wiley & Sons.

田嶋清一（1986）人間の進化と感情の機能—プルチックの感情の心理進化論（斎藤勇編『感情と人間関係の心理』8章　84－92. 川島書店）

Young, P. T.（1973）EMOTION IN MAN AND ANIMAL— *Its Nature and Dynamic Basis.* 2nd. Ed. Robert E. Krieger Pub.